

# 通りすがりの「あまーい」出来事

松沢 孝博

行事協力の依頼を受けて度々保育所を訪れていた。打ち合わせも終わり、帰りかけようとした時、砂場にそれぞれ二つの器を持ちながらニコニコおしゃべりしている二人の女の子が窓越しに目に入った。Y子とK子である。Y子は昨日たまたま私に印象を残していた子どもであった。何が

始まっているかは分からなかったが、丁度二人が砂場に腰を下ろそうとしたところである。私は場所を移し、少し離れたところから二人の遊びに惹き付けられてしまう。実に楽しそうにY子とK子は砂遊びをしているが、どうもキーキ屋さんごっこをしているようである。K子は器に砂を入れて

上から何度もたたき、それを皿の上に逆さまにして形を作り「おいしいケーキです、どうぞ」といってY子に差し出している。Y子は「ありがとう」と言つて両手で大事そうに口に持つていき、「あまーい！　おいしい。ママありがとう」と言う。K子が間髪を入れず「違うよ、K子はケーキ屋さんだよ」という。Y子は「あつ、そうか！」と言いながら皿をゆっくり砂場の縁の上に置く。そして今度はY子が形の違った器に砂を入れてそれに少しの水を加えて更に砂に加えて、「新しいケーキ」と言いながら作っている。Y子は器から砂を出さずにその器ごとK子に差し出し、「はい、新しい、おいしいケーキです、どうぞ」と言う。K子は「ありがとう。おいしいねー！」と応え、二人で笑い合っている。実に平和そうであり、柔らかな日差しのもと私自身の気持ちも和み、帰る

ことを忘れていた。

帰りの道すがら、子どもたちの楽しさの余韻に浸りながらも、ケーキ屋さんとしてのやりとりが、お母さんとのやりとりの世界へ変わったのはどういうことだろうと考えていたところ、昨日のY子のことが思い出されてきた。

前日の出来事。ぼつぼつお母さんが迎えに来始めている。Y子は目ざとく園庭の端にある門から入ってくるお母さんを見つけ、お母さんのもとに駆け寄り泣きじゃくっていた。お母さんが驚きながら「どうしたの？」とたずねると、Y子は小さい声で「ブランコでできなかった」と訴えている。それまで泣き顔を見せてもいなかったたので、たまに側にはいた私も驚く。お母さんは「そうなの」と言いながらブランコにチャラツと目をやる。ブランコは帰りの迎えを待っている子どもたちで占領



されている。「それじゃ明日ブランコしよう」そこへY子の荷物を持った担任も来て「今日、ブランコ乗れなかったね。あしたは乗ろうね、Y子ちゃん。おかあさん、さつき乗れたかった時に友達がブランコに殺到して乗れなかったらしいのです」と伝える。Y子の泣き声は小さくなっているが、依然としてお母さんのスカートに顔を埋めている。お母さんは「そうですか。そういうこともあるでしょう。Y子ちゃん、ブランコは明日もあるからね。明日乗ろうね。先生ありがとうございました」と言い、Y子を小脇に抱えるよう

にして家路につく。Y子はお母さんのスカートに顔を埋めながら右の手だけを担任に向けてバイバイをしている。担任も「明日乗ろうね、Y子ちゃんまた明日。バイバイ」と対応してクラスに戻る。お母さんは門を出たところで、膝を下ろしてY子に「そうだ、お家の近くの公園で一一緒にブランコ乗ろう!」と言っている。Y子はお母さんの顔を見ながら機嫌を直したようにして「うん!乗ろう!」と応えている。そして、お母さんとY子は手をつないで帰っていく。足取りもすっきり変わっていた。

お母さんはY子に帰ることを急かせることもなく、また我慢や説得を強いることもない。そして誰かを非難することもなく、ただY子の気持ちに沿い、Y子の気持ちに答えようとしていることに私は感心したのである。このあとY子がお母さん

と一緒に過ごす中で癒されて気持ちを立て直すことができることを願う一方で、すっかり気持ちをとり戻し、明日もいつもと変わらぬY子であるだろうと確信に近い思いをも抱いたのである。

たまたま目にした二つの出来事は親と子どものかかわりを考えさせてくれた。不安や寂しさなど幼い子どもにとって危急存亡の時もお母さんによって癒されているのであろう日頃のお母さんとY子の信頼のある関係や平和な関係が想像された。ケーキ屋さんからお母さんとの世界に変化したのも、それくらいY子にとって、ケーキの甘さやおいしさよりお母さんとの関係の方が勝っているのだろう。「甘い、おいしい、ママありがとう」はケーキの甘さ、おいしさを表現したのであろうが、ケーキより甘い嬉しいお母さんとの日常

的なかわりが表現されたようにも感じられたのである。

このような光景はあまりにも日常的であり、通りすがりの光景でもあるにもかかわらず、二つの出来事が時間経過とともに焼き付いたのである。

幼稚園や保育所を訪れて話題になるのは、困ったと表現された子どもたちへの対応の問題、親の問題、親子の問題が非常に多い。また、昨今の殺伐とした親子関係や子どもがおとなによって犠牲になることを見聞きするなかで、私自身が子どもの平和な穏やかな、そして楽しい姿に触れることを求めているのかもしれない。その思いだけが先走らなければいいのだが。

(国立音楽大学)